

# 飼育レポート

## トナカイの暑さ対策を追求して

飼育展示担当 柴田 典弘



高温時の集中ケア

毎年6月から9月末までの約4ヶ月間、ツンドラ地帯で生息しているトナカイの飼育管理上欠かせないのが「暑さ対策」です。さらに、7月中旬からは宿敵「サシバエ」対策も加わります。いずれの対策も突き詰めると「暑さ対策」にまとめられますが、2年間徹底的に取り組んだ結果、サシバエ対策が暑さ対策とともに重要なことが分かつてきました。

動物の暑さ対策は日陰を作ることから考え始め、次のステップとして散水、さらには氷や冷凍ペットボトルの設置など、より過ごしやすい環境を作り上げることが中心となります。2013年の6月にトナカイの担当となりましたが、その直後から暑さに苦しむトナカイと向き合い続けてきました。スプリンクラーの設置から始め、7月、8月は冷凍ペットボトルを体の周りに密着させるなど、暑さ対策の基本的な手法をかたくなに実践する日々でした。冷凍ペットボトルは3頭に対して最大約100本使用したこともあります。しかし、結果的にこれらの取り組みでトナカイが十分に癒されることはありませんでした。なぜなら、一日中吸血性の「サシバエ」に付きまとわれているため、逃れようと数十分毎に展示場を走り回っていて、そもそもリラックスできる時間も場所もないのです。さらに、原因は不明ですが、トナカイは他の動物よりも明らかにサシバエを多く誘引していることが分かりました。

初年度の反省を踏まえ、2014年のシーズンは、サシバエ対策として虫よけ剤の使用を開始しました。およそ3~4時間に一

回ずつ散布することにより、一気に解決を図ろうとの試みでした。これは想定以上に高い効果があり、虫よけ剤については今年度も継続実施しています。ただ、気温が30℃を超えると、暑さ・サシバエ対策の効果が現れづらくなってしまいます。苦しそうな呼吸のトナカイを見て、「ここで諦めたら、飼育していることを悔やんでしょう」。そう思った私は、さらに一步前に踏み出すことを決意しました。それが「トナカイの自発的遊泳」の模索です。そもそも野生のトナカイの1年は泳ぎと共にあり、気温や水温に関わらず泳ぐことで知られています。当然ながら私も知つてはいましたが、既存の展示場に設置されている流水施設(トナカイのせせらぎ)があることで、どこか満足していたように思えます。水深は一番深いところでも約20cmと泳ぐことは到底できないものの、トナカイが脚だけ水に入っている姿が確認されると嬉しく思う程度でした。

2014年8月、ルドルフ(オス 当時1歳)の体重増加を目的として取り組んでいた、採食目的のお散歩放牧中、園内にある塩曳潟の水辺に辿り着いた時「ここで泳がせたい」と感じました。初めて水辺に来たルドルフでしたが、水に対する抵抗感は全く感じられず、今にも泳ぎだしそうに見えました。その後、サクラ(メス 当時9歳)でも同様の反応が見られ、今年に入ってから具体的な実施手法の検討を開始しました。

2015年5月18日の飼育日誌に「10歳のトナカイが初日から泳いだことには驚かされた」と記載しました。7月以降も暑さはもちろんですが、一定数のサシバエが吸着した途端水に入る様子が確認され、その効果の高さが証明されました。暑さ対策を追及し続けた約2年間でしたが、ようやくトナカイ自身が自らの意思で対策を選択できる環境に辿りつくことができました。

現在、不定期ではありますが、園内塩曳潟の一部をケージで囲った「鳥っここの水辺」で、トナカイの水中散歩を実施しています。今後も、この環境をさらに有効的に活用するための手法を模索し続けたいと思います。



嬉しそうに水に入る様子

泳ぐトナカイ

## シロフクロウ

飼育展示担当 川本 朋代



今年、大森山動物園でシロフクロウが初めて産卵・孵化しました。生まれたヒナはバックヤードで飼育している個体も含め全部で11羽。シロフクロウはすっかり大所帯になりました。そんな中、末っ子が弱っていたため、人にならすことも兼ねて、チームを組み人工育雛することになりました。

人工育雛1日目の時点で、このヒナは生まれて10日目のまだ手のひらサイズで体重140gでした。しかし、ヒヨコのような愛らしさはまったくありません。なにしろ目は小さくギョロギョロしており、口は顔の1/3を占めるほど大きく、どこかモンスターを思わせました。また、体には所々羽が生えておらず、ピンクの地肌はむき出でみすぼらしい姿でした。ひいき目に見てもカワイイとはとても言えず、「本当にこのヒナはあの美しいシロフクロウのヒナなのだろうか」と疑うほどでした。

そんなヒナですが、エサをよく食べ、日に日に大きくなっています。1日見ないだけでも、同じヒナとは思われないほど一回りも二回りも大きくなっているのです。そして、人工育雛を始めて11日過ぎた頃には、体重は約4.5倍の645gにまで増え、体は灰色の羽毛で覆われました。不細工と言われた時とは一変し、顔つきはしっかりし、灰色のふわふわもこもこの塊になりました。この辺りから、カワイイかも……?という声が上がってきました。

「ハク」と名づけられたこのヒナは、今では親と同じぐらいの大きさにまで成長しました。まだ羽は生えそろっていませんが、白い羽は少しずつ生えてきています。

現在腕に乗せる練習をしています。デビューしたら、ぜひ見に来てください。



12日齢  
(人工育雛1日目)

63日齢  
(人工育雛52日目)

21日齢  
(人工育雛10日目)

## 動物病院から

### アムールトラの「アシリ」

獣医師 小川 裕子



今年の5月にアムールトラのアシリ(メス)が亡くなりました。16歳でした。

みんなに愛され、何度も会いに来てくださるファンのかたがたも多くいました。人気イベントの「まんまタイム」では、大きな前脚で肉を押さえるダイナミックな動きで子どもたちを驚かせしていました。

そんな元気いっぱいのアシリですが、5月中旬に食欲が落ちてきました。ふだんは肉を3~4kg位ペロリと完食しますが、少し残すようになり、ついには水しか飲まなくなってしまいました。

そんな中、私たち獣医師も懸命に治療を試みました。注射を打つにも採血するにも、かまれると危険なので直接アシリに触れることはできません。注射は、「吹き矢」を使って行いました。

採血は、血液検査で腎臓や肝臓がどのような状態なのか間接的に評価するために行うのですが、麻酔をかけないと採血できません。そこで、採取できる糞便と尿を主に検査し、指標としてですが、肝臓腎臓等に病気がないかどうか確認しながら治療しました。

また、飼育員もアシリが食べやすいものを、鳥がダメなら豚肉をカットして与えるなど、一生懸命ケアしていました。あるとき、猫用の高栄養処方食の缶詰を食べるか疑問に思いつつも飼育員に渡したところ、「すぐに試してみましょう」と行動してくれ、檻の奥に居るアシリの口元に届くようにと細いはしごを上り、檻の上から缶詰の中身を与えてくれました。「アシリ、おいしそうだよ～。少しでも食べよう!」とアシリにやさしく声をかけている飼育員の姿が忘れられません。

懸命の看護のかいもなく、アシリは5月27日に亡くなりました。検査してみると、全身のガンが原因でした。最後は呼吸も大変でしたが、治療の痛みにも耐えて良く頑張ってくれました。お客様や飼育員に愛され、幸せな一生だったと思います。

